

論文

「教育の方法及び技術」のカリキュラム開発に関する実践的考察

長倉 守

(岐阜大学大学院教育学研究科)

A Practical Study on Curriculum Development of " Educational Methods and Skills "

NAGAKURA Mamoru

Abstract

The purpose of this research is to develop, practice, and verify the curriculum for class subjects based on "Educational Methods and Skills" in the Core Curriculum of the Teaching Profession. As a result of the verification, the effectiveness of the development framework examined based on the core curriculum and previous research was clarified.

キーワード： 教育の方法及び技術 教職課程コアカリキュラム カリキュラム開発

1 はじめに

本研究の目的は、教職課程コアカリキュラム「教育の方法及び技術」に基づく授業科目について、教職課程改革の動向や先行研究を踏まえ、カリキュラムの開発や実践、検証を行うことである。これをもとに、その意義や課題について今後の議論に向けた示唆を得たいと考える。

教員養成に関する近年の政策動向については、2016年の教育職員免許法の改正、2017年の教育職員免許法施行規則の改正を経て、ICTを用いた指導法や主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善等、学校現場で必要とされる知識や技能を養成課程で獲得できるよう、教職課程の充実が図られている。これを受け、同年には教職課程コアカリキュラムが作成され、全ての大学の教職課程において共通的に修得すべき資質能力が明確化された。

さらに2021年には、教育職員免許法施行規則等の一部改正が施行され、教職課程コアカリキュラムに「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」が新設された。これにより、改正前の「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」については、「教育の方法及び技術」及び「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に改訂のうえ提示されており、2022年度以降に入学する者に適用されている。

このような改正の背景には、2019年の教育再生実行会議の提言や2020年の中央教育審議会の教員養成のフラッグシップ大学検討ワーキンググループの最終報告において、今後教師に求められる資質能力として、先端技術を効果的に取り入れたICT活用指導力が提示され、養成段階における指導力量の育成が要請されていることがある。さらにICT活用指導力については、2021年の「令和の日本型学校教育」の構築を目指した

中央教育審議会の答申においても言及され、教員養成における喫緊の課題として養成機関である大学や教員免許事務を取り扱う教育委員会等、各方面において受け止められている。

こうした動向を本研究の目的との関連から述べるならば、改正前の「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の開発を含む。）」に係る教職課題コアカリキュラムのうち、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に関しては、カリキュラムの在り方や方向性等を含めてさまざまな提言が示されている。しかしながらもう一方の「教育の方法及び技術」については、表1に示すように、改正前の「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」から「情報機器及び教材の活用」を差し引いたものの提示に留まっている。

こうした状況は先行研究においても同様である。「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」については、稲垣ら（2021）がコアカリキュラムの改訂を踏まえ、学校教育におけるICT活用の理論と実践について整理している。また柄本（2021）や石川ら（2022）は授業科目の具体を提案している。他方、「教育の方法及び技術」については、上述の教員養成に関する政策動向との関連において実証的に検討された先行研究は管見の限り見られない。吉田（2019）は改正された教職課程コアカリキュラムについて検討しているが、理論的な研究に留まり、本研究のように開発したカリキュラムを実践し検証まで行っているわけではない。このように現状においては、本授業科目について研究の蓄積が限られている。たしかに、新設されたのは「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」であることから、教職課程コアカリキュラム上において変化が少ない「教育の方法及び技術」に議論が及ばないのは

表1 教職課程コアカリキュラム「教育の方法及び技術」における改正前後の比較

〔改正前〕教育の方法及び技術 (情報機器及び教材の活用を含む。)		〔改正後〕教育の方法及び技術
全体目標	教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）では、これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な、教育の方法、教育の技術、情報機器及び教材の活用に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。	教育の方法及び技術では、これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な、教育の方法及び教育の技術に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。
(1) 教育の方法論	一般目標 これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法を理解する。 到達目標 1) 教育方法の基礎的理論と実践を理解している。 2) これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するための教育方法の在り方（主体的・対話的で深い学びの実現など）を理解している。 3) 学級・児童及び生徒・教員・教室・教材など授業・保育を構成する基礎的な要件を理解している。 4) 学習評価の基礎的な考え方を理解している。	これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法を理解する。 教育方法の基礎的理論と実践を理解している。 これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するための教育方法の在り方（主体的・対話的で深い学びの実現など）を理解している。 学級・児童及び生徒・教員・教室・教材など授業・保育を構成する基礎的な要件を理解している。 学習評価の基礎的な考え方を理解している。
(2) 教育の技術	一般目標 教育の目的に適した指導技術を理解し、身に付ける。 到達目標 1) 話法・板書など、授業・保育を行う上での基礎的な技術を身に付けている。 2) 基礎的な学習指導理論を踏まえて、目標・内容、教材・教具、授業・保育展開、学習形態、評価規準等の視点を含めた学習指導案を作成することができる。	教育の目的に適した指導技術を理解し、身に付ける。 話法・板書など、授業・保育を行う上での基礎的な技術を身に付けている。 基礎的な学習指導理論を踏まえて、目標・内容、教材・教具、授業・保育展開、学習形態、評価規準等の視点を含めた学習指導案を作成することができる。
(3) 情報機器及び教材の活用	一般目標 情報機器を活用した効果的な授業や情報活用能力の育成を視野に入れた適切な教材の作成・活用に関する基礎的な能力を身に付ける。 到達目標 1) 子供たちの興味・関心を高めたり課題を明確につかませたり学習内容を的確にまとめさせたりするために、情報機器を活用して効果的に教材等を作成・提示することができる。 2) 子供たちの情報活用能力（情報モラルを含む）を育成するための指導法を理解している。	

当然であると考えられることもできよう。しかし、この機を「教育の方法及び技術」に関する授業科目の意義や方向性等について課題を見出し問い直す機会とすることもできよう。

「教育の方法及び技術」の授業科目において中心的に育成を図る学習指導に関する力量については、教員に求められる資質能力の中核に位置付けられる。例えば、2022年に改正された公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針では、五つに再整理された教員の指標の一つとして、学習指導が提示されている。またその中では、学習指導に関する教師に共通的に求められる資質の具体的内容として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等による学習者中心の授業の創造、教材研究や授業研究等による授業設計・実践・評価・改善等を提示している。こうした教師に求められる資質能力と教職課程コアカリキュラムを照合するならば、養成段階において学習指導に関する資質能力の育成の中核を担うのは「教育の方法及び技術」であると言える。

そこで本研究では、「教育の方法及び技術」に関するカリキュラムの開発や実践、検証を踏まえて、その

在り方や方向性について、今後の議論の足場となるような示唆を得られるよう検討を行うこととする。これにより、カリキュラムの改善や充実、引いては養成段階における教員としての資質能力の育成に寄与することが期待される。

2 方法

2.1 カリキュラムの構想

教職課程コアカリキュラムをもとに、教育政策や学習指導要領に関する動向、「教育の方法及び技術」の内容に関する先行研究を検討し、表2に示す授業の目標と授業計画を構想した。構想にあたっては奈須（2017）、石井（2020）、鹿毛（2019）などを参考に検討し、カリキュラムの開発枠組みとして、とくに①今日的に求められる授業づくりに関する講義及び考察課題の提示とシェアリング、②授業づくりの具体的視点に関する講義及び考察課題の提示とシェアリング、③教育の方法及び技術に関する経験との照合の三点に留意した。

一つめの今日的に求められる授業づくりについては、2017年版学習指導要領に示された資質・能力に関する

三つの柱の育成、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善、OECD ラーニングコンパス 2030 に関する動向や背景となる基礎的な理論を取扱い、今後において創造が目指される授業づくりの枠組みについて概観できるようにした。

二つめの具体的視点については、先行研究を踏まえつつ、今日的に求められる授業づくりとの関連において、目標の明確化、教材研究、授業の展開、指導技術、学習評価について取り扱うこととした。

三つめについては、とくに教育実習における学習指導案作成や授業実践と講義内容との照合の場を継続的に設定し、理論と実践の往還に留意した。表 2 は、教育実習（学校体験活動）に係る教職課程コアカリキュラムのうち「学習指導及び学級経営に関する事項」を示したものであるが、「教育の方法及び技術」において示された内容との関連性が非常に高いことが理解される。本教職科目と教育実習の学修との連動性を高めることには、学習指導に関する資質能力の育成に意義があると考えられる。

表 2 教職課程コアカリキュラム「教育実習」(抜粋)

教育実習（学校体験活動）	
(3-1) 一般目標	大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。
学習指導及び学級経営に関する事項	到達目標
	1) 学習指導要領及び児童又は生徒の実態等を踏まえた適切な学習指導案を作成し、授業を実践することができる。
	2) 学習指導に必要な基礎的技術（話法・板書・学習形態・授業展開・環境構成など）を実地に即して身に付けるとともに、適切な場面で情報機器を活用することができる。
	3) 学級担任の役割と職務内容を实地に即して理解している。
	4) 教科指導以外の様々な活動の場面で適切に児童又は生徒と関わるができる。

2.2 実践

2022 年 10 月～11 月に X 大学教育学部の 3 年生を対象とした教職課程の授業科目「教育の方法・技術」において、上述の開発枠組みに基づいてカリキュラムを開発し授業を実施した。この授業科目は、改正前の「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む。)」に対応する科目として開講されている。表 3 は授業の目標と授業計画を示したものである。

このうち本研究の分析対象としては、研究の目的を踏まえ、改正後の教職コアカリキュラム「教育の方法及び技術」との関連から、ユニット 1「授業づくりの

枠組み」及びユニット 2「授業づくりの具体的視点」に焦点を当てることとする。ユニット 1 の内容については、上述の開発枠組みにおける①今日的に求められる授業づくりに該当し、ユニット 2 については②授業づくりの具体的視点に該当する。③については、ユニット 1 とユニット 2 を通して照合の場を設定した。

ユニット 1 からユニット 2 までの授業は、時間割上に固定された曜日と時間帯にて、週あたり 1 回の授業を計 9 回実施した。受講登録者は 105 人である。各回の授業では、まず情報提供として講義を 45 分程度行い、その後、講義を足場とした個や小集団での考察課題についての検討及び全体でのシェアリングを行った。

各回の授業では、③との関連から 2022 年の前期に学修した教育実習における授業づくりに関する経験との省察及び照合を重視した。講義では、取り扱う内容と教育実習で見聞・経験した場との関連について思考や場面の想起を促し、理解につながるように留意した。とくに考察課題では、教育実習で自身が作成した学習指導案を省察・照合させ、改善案の思考を促した。研究授業の授業改善を課題として提示して、学びを喚起するようにした。

2.3 検証方法

ユニット 1 とユニット 2 の終了後に受講者を対象に質問紙調査を実施した。ユニット 1 終了後では、講義前後の資質・能力の育成や主体的・対話的で深い学び、双方の関係に関する理解や授業づくりについて、4 件法で質問した（4 当てはまる、3 やや当てはまる、2 あまり当てはまらない、1 当てはまらない）。また、自由記述としてユニット 1 で考えたことや気付いたこと等に関する記述を求めた。

ユニット 2 終了後においては、授業づくりの具体的視点に関する認識の高まりに関して、ユニット 1 と同様に 4 件法で質問するとともに、自由記述としてユニット 2 で考えたことや気付いたこと等に関する記述を求めた。また講義内容の理解にあたり経験との照合に関する有効性について同様に 4 件法で質問した。

分析方法については、ユニット 1 学修後の質問紙調査については、対応のある t 検定により事前及び事後における得点の平均値の比較を行うとともに、自由記述についてはテキストマイニングによる分析を行った。ユニット 2 学修後の質問紙調査は、各質問における回答数や割合等の得点の分布を整理するとともに、自由記述についてはテキストマイニングによる分析を行った。なお、 t 検定においては SPSS、テキストマイニングについては KH Coder¹を用いて分析を行った。

3 結果と考察

3.1 授業づくりの枠組みに関する認識

ここでは、ユニット 1 終了後に実施した質問紙調査

表3 授業の目標と授業計画

授業の目標		
これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力の育成に必要な主体的・対話的で深い学びを実現する教育の方法・技術、情報機器の活用に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。その際、授業づくりの枠組みや具体的視点などに触れ、学習指導案を見つめ直すことを通して、自己のキャリア形成の方向性と関連付けて授業づくりに関する教育の方法・技術の基本的なことがらについて考え、理解することができる。		
回	ユニット	内容
1	ユニット1 授業づくりの枠組み	ガイダンス よい授業とは？
2		これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力
3		主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
4		教育の方法に関する思想・理論、授業を構成する基礎要素
5	ユニット2 授業づくりの 具体的視点	目標の明確化
6		教材研究と教材の活用
7		授業の流れ・組立てと展開、学習形態と学習環境
8		授業を支える指導技術と教師の意思決定
9	ユニット3 ICTの活用	指導と評価の一体化
10		授業における情報機器の活用法
11		情報活用能力（情報モラル）の育成に関する授業実践
12		授業の実践・省察・改善 本時の目標と実現の方法、学習評価
13	ユニット4 授業づくりの実際	授業の実践・省察・改善 指導技術と意思決定
14		授業の実践・省察・改善 ICTの活用
15	総括	教育の方法・技術に関する総括

表4 授業づくりの枠組みに関する学生の認識

項目	事前 平均値	<> <i>p</i>	事後 平均値	事前 <i>SD</i>	事後 <i>SD</i>	<i>t</i> 値
資質・能力に関する理解	2.87	< **	3.45	0.80	0.54	7.83
資質・能力の育成を意識した授業づくり	2.79	< **	3.43	0.70	0.52	10.62
主体的・対話的で深い学びに関する理解	2.82	< **	3.39	0.70	0.56	8.25
主体的・対話的で深い学びを意識した授業づくり	2.89	< **	3.37	0.71	0.59	7.10
資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学びの関係に関する理解	2.44	< **	3.21	0.80	0.53	9.56
資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学びの関係を意識した授業づくり	2.49	< **	3.17	0.79	0.59	9.04

** *p* < .01 n=89

について結果を示すとともに考察を行う。まず、表4は授業づくりの枠組みに関する講義受講前（事前）と受講後（事後）の認識についての分析結果である。

受講前の認識において平均値が最も高かったのは、主体的・対話的で深い学びを意識した授業づくりであったが、受講後の認識においては資質・能力に関する理解、資質・能力の育成を意識した授業づくりの順に続いた。いずれの項目においても事後の得点の平均値が1%水準で有意に高かった。特に *t* 値が高い項目は、資質・能力の育成を意識した授業づくり、資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学びの関係に関する理解、資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学びの関係を意識した授業づくりであった。

次に、表5と図1は、ユニット1の学修で考えたこと等に関する自由記述についての抽出語の出現回数と共起ネットワークを示したものである。出現回数の多

い抽出語は、「授業」、「考える」、「知識」、「学び」、「能力」等であった。また高い共起関係が見られるのは「授業－考える」、「知識－技能－活用」、「資質－能力－育成」、「主体－対話－深い－学び」、「教師－意識－力－身（に付ける）」、「時代－求める」等であった。表6は、このような語句の文脈における記述例を KWIC コンコーダンスから参照し抽出した。ここからは考察の視点として、授業改善の視点としての主体的・対話的で深い学び、資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学びの関係、知識の活用、授業づくりと教育の国際的潮流との関係を窺うことができる。

以上の結果については、ユニット1の学修で育成を図ろうとした授業の目標や意図と合致する。これからの社会で求められる資質・能力、主体的・対話的で深い学び、両者の関係に関する理解、それらに基づく授業づくりに関し、概ね受講生の認識が高まったと理解さ

表5 ユニット1学修後
における頻出語

抽出語	回数	抽出語	回数
授業	104	身	19
考える	44	求める	18
知識	42	生徒	18
学び	37	時代	16
能力	37	力	16
子ども	33	意識	15
必要	32	育成	15
思う	29	技能	15
主体	27	子供	15
大切	27	教師	14
学習	26	良い	14
深い	24	活用	13
学ぶ	22	教育	13
感じる	22	持つ	13
資質	22	自分	13
対話	20		

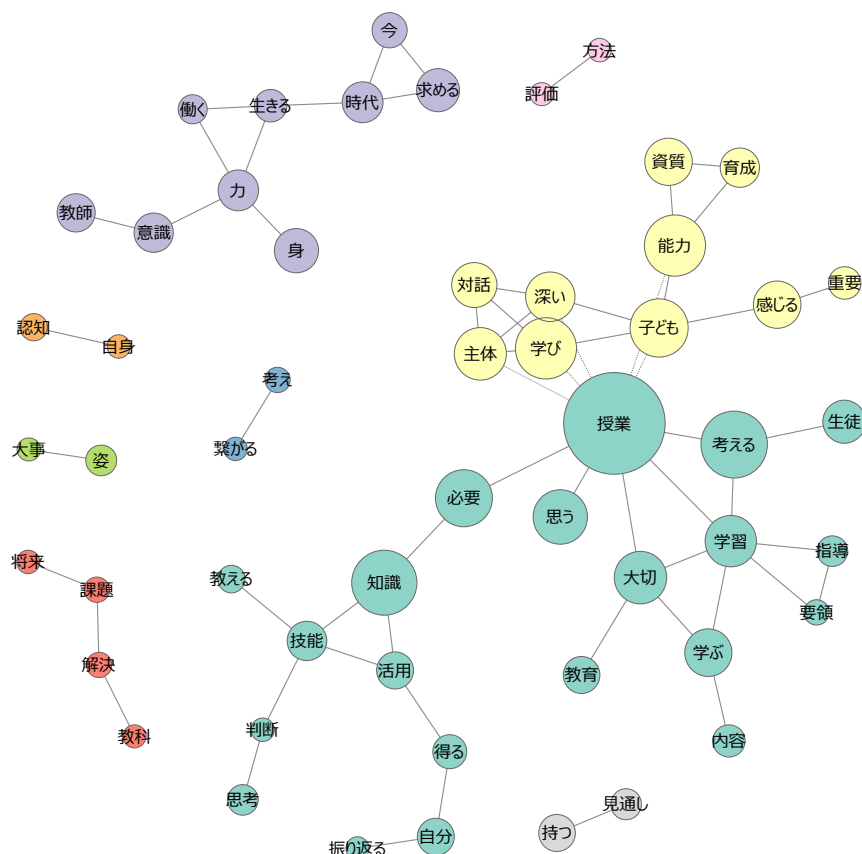


図1 ユニット1学修後の共起ネットワーク

表6 ユニット1学修後の記述例

視点	記述例
授業改善の視点としての主体的・対話的で深い学び	主体的・対話的で深い学びは、ぼんやりとは「こういうことだ」とわかっている、自分の授業を振り返る時の具体的な視点がなかったが、今回のユニットを通して、具体的な授業改善の視点を得ることができた。
資質・能力の育成と主体的・対話的で深い学びの関係	学びたい内容と目標を、主体的・対話的で深い学びを通して、子どもたちに身につけさせたい資質・能力を身につけさせる。
知識の活用	教科の固有知識を伝授するために授業があるのではなく、固有知識をもとにどう課題解決していくかを考える過程が授業にあたることに気づいた。固有知識の活用方法(=学習活動)は単元・授業によって異なるので、どんな活用方法が子どもの学びにとって良いのかは、更に研究したい。
授業づくりと教育の国際的潮流との関係	自分の研究授業を振り返り、知識技能の面での目標は意識していたが、その先どう使うか、そしてそれらが子供たちの将来にどう影響を与えていくのかということについて、もっと意識しておけたら良かったと思う。ウェルビーイングやラーニングコンパスの話聞いて、子供たちの将来まで見通しをもって授業作りをしたいと思った。

れる。田村(2022)は教職経験年数の少ない教員については、授業づくりにおいて資質・能力の育成よりも授業で取扱う内容を分かりやすく面白く伝えることを重視する傾向があることを指摘している。本講義の受講生においても、講義の中での反応から同様の傾向が見られた。また「主体的・対話的で深い学び」については、以前からよく耳にしたとの反応もあった。そこでユニ

ット1ではこのような受講生の実態に添いつつ、これからの時代に求められる資質・能力や授業づくりの動向や指針、背景となる基礎的理論や国際的潮流について講義するとともに、考察課題として教育実習での経験との照合を図った。こうしたことが結果として表れたと考えられる。

3.2 授業づくりの具体的視点に関する認識

次に、ユニット2終了後に実施した質問紙調査について結果を示すとともに考察を行う。表7は授業づくりの具体的視点に関する認識の高まりについての分析結果である。

表7 授業づくりの具体的視点に関する認識の高まり

項目	4	3	2	1	欠
目標の明確化	41	51	3	1	
	42.7	53.1	3.1	1.0	
教材研究	34	56	3	1	2
	36.2	59.6	3.2	1.1	—
授業の展開	31	57	6	2	
	32.3	59.4	6.2	2.1	
指導技術	35	48	8	1	4
	38	52.2	8.7	1.1	—
学習評価	51	39	6	0	
	53.1	40.6	6.3	0.0	
資質・能力の育成	43	49	4	0	
	44.8	51.0	4.2	0.0	

上段(回答数)、下段(%) 欠を除く

いずれの項目においても、「4 当てはまる」と「3 やや当てはまる」の肯定的評価が90%以上であった。とくに肯定的評価が高かったのは、目標の明確化と教材研究に関する認識の高まりであった。またユニット2の学修事項に関する総括的な認識の高まりについての問いである、資質・能力の育成に関する認識についても肯定的な評価が高かった。他方、「4 当てはまる」の評価が最も多かったのは、学習評価に関する認識の高まりであった。

次に、表8と図2は、ユニット2の学修で考えたこと等に関する自由記述についての抽出語の出現回数と共起ネットワークを示したものである。出現回数の多い抽出語は、「授業」、「評価」、「目標」、「考える」、「明確」等であった。また高い共起関係が見られるのは「授業—目標—明確—評価」、「振り返る—自分—指導—学習—改善」、「育てる—資質—能力—学—重要」等であった。表9は、ユニット2における記述例を KWIC コンコーダンスから参照し抽出したものである。ここからは考察の視点として、授業において育成を目指す目標や資質・能力の明確化に関する関連性や重要性、評価の意味、視点の多様性・総合性、学習者の視点、経験との照合による省察や改善への意欲を窺うことができる。

以上の結果については、ユニット2の学修で育成を図ろうとした授業の目標や意図と合致する。今目的に求められる授業づくりとの関連において、目標の明確化、教材研究、授業の展開、指導技術、学習評価につ

いて、概ね受講生の認識が高まったと理解される。

ここで特に着目したい点としては、図2の共起ネットワークにおけるサブグラフ間の共起関係である。サブグラフ内には上述のような共起関係が見られるが、ユニット2における共起関係の特性は、サブグラフ間の共起関係が多様に見られる点である。これは図1に示したユニット1における共起ネットワークと比較すると一段と明らかである。ユニット1の共起関係が比較的サブグラフ内に留まっているのに対し、ユニット2の共起関係はサブグラフ間に広がり複雑である。抽出語の全てがなんらかの共起関係を有していることが見て取れる。

こうした傾向は、表9の記述例からも見出すことができる。目標の明確化と評価や声掛けとの関連、資質・能力の明確化と教材研究や授業の流れとの関連、授業づくりにおける多様な視点に触れる記述が見られた。たしかに、評価についての新たな認識の深まりや学習者の視点に立った目標の明確化など、ユニット2の学修を通じた認識の深まりや自身の変容に関する記述も多く見られたが、授業づくりを構成する要素やその関連性に関する記述が多く見られた。これは、講義の中でも、個々の要素とともに相互の関連性についても話題提供を行うとともに、考察課題の視点としても継続的に取り上げたことが有効であったと考察される。

一方、講義で取り上げた授業づくりの具体的視点のうち、授業の展開と指導技術については、肯定的評価がそれぞれ90%以上であったが、他の視点が95%程度であった点と比較すると、肯定的回答が若干少ない結果が示された。これは、授業の展開と指導技術については、授業における教師と児童生徒との実際の相互作用の展開において中核となる事項であり、留意すべき事項が多岐にわたることが影響しているものと考察される。たしかに、これらの点について教職課程コアカリキュラムでは、「教育の方法及び技術」においては「話法・板書など、授業・保育を行う上での基礎的な技術を身に付けている」が示され、「教育実習(学校体験活動)」では「学習指導に必要な基礎的な技術(話法・板書・学習形態・授業展開・環境構成など)」とあり、授業実践の複雑性に起因する指導技術の豊富な要素が示されている。

授業の展開や指導技術については、受講者が直面する実践的課題であり大変関心が高い。改正前のコアカリキュラムで実施される本授業科目においては、授業の展開や指導技術については、ユニット4「授業づくりの実践」において、学習指導案の再検討や模擬授業を通じて改めて取り扱う予定である。一方、改正後のコアカリキュラムでは、一層限定的な時数の中で受講者に理解や身体化を促すことが求められよう。斎藤(2006)や大西(1987)などの先行研究を踏まえ、これらを養成段階における授業科目としていかに取扱う

表8 ユニット2学修後
における頻出語

抽出語	回数	抽出語	回数
授業	100	重要	15
評価	74	資質	14
目標	60	能力	14
考える	38	必要	14
明確	37	行う	12
指導	28	導入	12
大切	27	方法	12
子ども	26	教師	10
学ぶ	23	実習	10
思う	23	生徒	10
感じる	22	改善	9
教材	19	具体	9
研究	18	言葉	9
自分	18	子供	9
意識	16	流れ	9
学習	16		

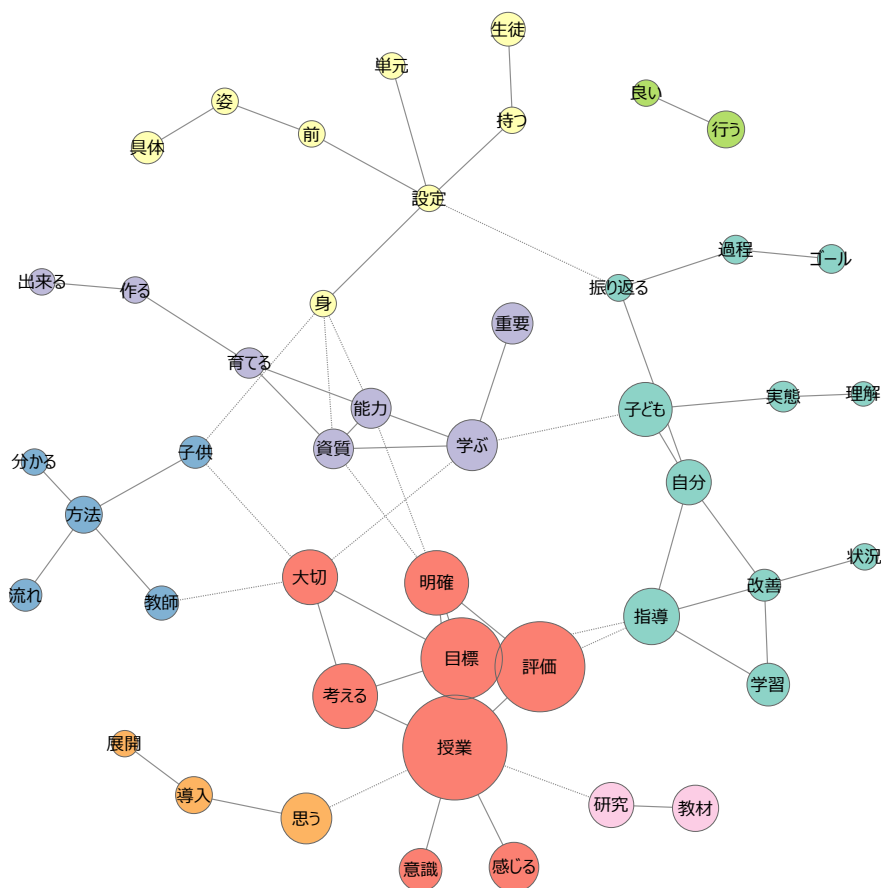


図2 ユニット2学修後の共起ネットワーク

表9 ユニット2学修後の記述例

視点	記述例
目標明確化の関連と重要性	目標を明確にすることで、子どもたちにつけたい資質能力や、評価の方法、声掛けまで変わってくることが分かった。授業を考える上で、目標をしっかりと考えることが大切だと考えた。
資質・能力明確化の関連と重要性	育てたい資質・能力についてよく耳にはするけどあまり深く考えていなかった。しかしこのユニット2の授業を終えて育てたい資質・能力を明確にしたり、それに沿った教材研究や授業の流れを作ったり、その評価を行ったりと授業を作る上で資質能力は切っても切れない重要な観点であると学んだ。
視点の多様性・総合性	授業をつくる上で大切な視点は、単一なものではなく、目標であったり教材研究であったり、評価であったりと多岐にわたる。授業づくりは、こうした様々な視点の下に成り立っているということをあらためて実感するとともに、それぞれの内容を深めることができた。 授業づくりという言葉のなかに、目標の明確化や評価、指導技術など多くの要素に分解され、更に細分化されていることがわかった。
評価の意味	評価は単に生徒を評価するだけでなく、授業者の側が、自分の授業を省みるためにも重要な役割を持っていると分かった。
学習者の視点	授業づくりをしていく上で、目標が明確化されていることは、どのような授業にするのかという点で重要であるし、学習者の側からしても何を学ぶかが明確である方が、深い学びをすることに繋がると学んだ。
経験との照合による省察改善への意欲	自分の研究授業を振り返って、改善の余地があるということを経験1の時よりも明確な視点で見ることができた。特に、授業作りの過程でゴールから見据えて作るということ、発問ばかりであまり本質的な部分を捉えられていなかったということが見つかった。そのため、最後の学習指導案の改善ではそこに気をつけて改善してみたい。

かについて検討が求められよう。

3.3 経験との照合に係る有効性に関する認識

表 10 は、講義内容の理解にあたり、講義内容と教育実習における授業実践等の経験との照合を図る有効性についての分析結果である。

表 10 経験との照合による理解促進に関する認識

項目	4	3	2	1
経験との照合による	47	48	4	0
理解促進	47.5	48.5	4.0	0.0

上段（回答数）、下段（%）

これを見ると「4 当てはまる」と「3 やや当てはまる」の肯定的評価が 95%を超える結果であった。こうした結果及び表 9 に示した経験との照合による省察に関する自由記述の回答傾向から、経験との照合については概ね有効であったことが窺える。教育実習における実地での学習指導案作成に係る葛藤や苦悩、児童生徒との相互作用や自己効力感、指導教員による指導助言等、学校現場において教育実習生としてのリッチな授業づくりの経験と講義内容との照合を図ることにより、単に講義内容を羅列的に提供するよりも、理解や省察が促進されるとともに、受講者自身の授業観や学習観、授業実践力量の問い直しを図ることができたと推察される。

以上のここまでの考察から、本講義に係る教職コアカリキュラムの全体目標としての「これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な、教育の方法及び教育の技術に関する基礎的な知識・技能を身に付ける」については、ユニット 1 及びユニット 2 のみの検証ではあるが、概ね達成されつつあるように考察される。今後ユニット 4 「授業づくりの実践」における学習指導案の再検討や模擬授業の実施との連携を図ることにより、一層全体目標の達成が可能となるであろう。

4 おわりに

本研究の目的は、教職課程コアカリキュラム「教育の方法及び技術」を踏まえた授業科目について、教職課程改革の動向や先行研究を踏まえ、カリキュラムの開発や実践、検証を行うことであった。

本研究の成果としては次の二つである。一つは、改正された教職コアカリキュラムをもとに、取扱う内容に関する先行研究を踏まえ、カリキュラムを開発したことである。その際、とりわけ開発枠組みとして、①今日的に求められる授業づくりに関する講義及び考察課題の提示とシェアリング、②①を踏まえた具体的視点に関する講義及び考察課題の提示とシェアリング、

③教育の方法及び技術に関する経験との照合の三点を提示し、カリキュラム開発において留意した。二つは、開発枠組みをもとに授業に翻案のうえ、実際に実践しその有効性を実証的に示したことである。質問紙調査に関する統計的分析やテキストマイニングによる分析結果から、教職コアカリキュラムの到達目標を概ね達成できたことが明らかになった。またこれにより、開発枠組みの有効性が示唆された。教職課程コアカリキュラム「教育の方法及び技術」を踏まえた授業科目に関する先行研究においては、このような実証的な研究は見られず本研究の成果として指摘される。本稿の知見により、本授業科目に関するカリキュラムの改善や議論の充実、引いては養成段階における教員としての資質能力の育成に寄与することが期待される。

残された課題としては、「教育の方法及び技術」を 1 単位で実施する場合のカリキュラム構成に関する検討である。上述のとおり本研究におけるカリキュラム開発では、概ね、教職課程コアカリキュラムにおける「教育の方法及び技術」に関する全体目標が達成されつつあることが明らかになった。またユニット 4 との連携を図ることにより一層全体目標が達成されることを指摘した。しかし、1 単位での実施となれば、「教育の方法及び技術」に係るユニット 1、ユニット 2、ユニット 4 の枠組みは維持しつつ、取扱う内容の再整理が求められよう。中でも質問紙調査において肯定的評価が 90% 台前半に留まった授業の展開や指導技術については検討を要するであろう。例えば、石井 (2020) は、ICT 活用と伝統的な指導技術との融合を提起しているが、このような視点も重要であろう。

本稿では「教育の方法及び技術」で取扱う内容の重要性について、教員として求められる資質能力に関する指標との照合から、学校教育の基軸にある学習指導の中核となる資質能力の育成を図るカリキュラムであることを確認した。本稿の知見を養成段階における教員の力量形成に関する議論の足場とし、今後も授業づくりを巡る動向に留意しつつ継続的に検討を進めていきたい。

注

1 テキストマイニングによる分析にあたっては、客観性を担保するため、樋口耕一が開発した計量テキスト分析ソフトである KH Coder を使用した。KH Coder については、信頼性の高い手法として学術研究での使用も多く、分析の妥当性も確認されている。

参考文献

石井英真 (2020)、「授業づくりの深め方、ミネルヴァ書房、404p。
石川勝彦・百瀬光一・下崎聖 (2022)、「新設科目 (情報通信技術を活用した教育の理論及び方法) に関する

- 授業設計試案、中京学院大学紀要、1 (1)、pp. 105-113
- 稲垣忠編著 (2019)、教育の方法と技術 主体的・対話的で深い学びをつくるインストラクショナルデザイン、北大路書房、244p.
- 柄本健太郎 (2021)、情報通信技術を活用した教育の理論及び方法に対応した授業の提案—ICT に関する大学の教職課程授業での取り組みを踏まえて、武蔵大学人文学会雑誌、53 (1)、pp. 1-22
- 大島純他編 (2019)、主体的・対話的で深い学びに導く 学習科学ガイドブック、北大路書房、240p.
- 大西忠治 (1987)、授業づくり上達法 だれも語らなかった基礎技術、民衆社、212p.
- 大西忠治 (1988)、発問上達法—授業づくり上達法 PART 2—、民衆社、195p.
- 大前暁政 (2022)、本当は大切だけど、誰も教えてくれない、授業デザイン 41 のこと 明治図書、272p.
- 鹿毛雅治 (2019)、授業という営み—子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る—、教育出版、360p.
- 子安潤 (2021)、画一化する授業からの自律—スタンダード化・ICT 化を超えて—、学文社、208p.
- 斎藤喜博 (2006)、授業の展開、国土社、250p.
- 澤井陽介 (2020)、図解授業づくりの設計図、東洋館出版、152p.
- 授業力&学級経営力 編集部編 (2022)、明日の授業が変わる「発問」の技術、明治図書、136p.
- 授業力&学級経営力 編集部編 (2022)、明日の授業が変わる「板書」の技術、明治図書、136p.
- 白井俊 (2020)、OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム、ミネルヴァ書房、274p.
- 杉江修司 (2011)、協同学習入門 基本の理解と 51 の工夫、ナカニシヤ出版、157p.
- 田中耕治編 (2007)、よくわかる授業論、ミネルヴァ書房、232p.
- 田中耕治編 (2021)、よくわかる教育評価 第3版、ミネルヴァ書房、274p.
- 田中洋一 (2019)、コアカリキュラムに則した科目「教育の方法と技術」の再設計、日本教育工学会研究報告集、19 (4)、pp. 113-116
- 田村学 (2022)、「ゴール→導入→展開」で考える「単元づくり・授業づくり」 「学習指導要領がめざす」子を育む!、小学館、192p.
- 藤勝宣 (2017)、教育の方法及び技術に関する研究—「主体的・対話的で深い学び」を実現する実践的指導力の考察—、九州国際大学教養研究、24 (1)、pp. 49-61
- 長瀬拓也 (2014)、ゼロから学べる授業づくり、明治図書、168p.
- 奈須正裕 (2017)、「資質・能力」と学びのメカニズム、東洋館出版、216p.
- 野口芳宏 (2011)、野口流 教師のための発問の作法、学陽書房、123p.
- バリー・J・ジーマー・マン・ロバート・コーバック・セバスチアン・ボナー、塚野州一・牧野美和子訳 (2008)、自己調整学習の指導、北大路書房、132p.
- 樋口耕一 (2020)、社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版、251p.
- 堀裕嗣 (2012)、一斉授業 10 の原理・100 の原則、学事出版、196p.
- 三好真史 (2021)、教師の授業技術大全、東洋館出版、296p.
- 文部科学省 (2021)、教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行等について (通知)、https://www.mext.go.jp/content/20210810-mxt_kyoikujinzai02-000017343_3.pdf (参照日:2022年12月28日)
- 吉田佳恵 (2019)、「教育の方法及び技術」(教職課程コアカリキュラム)の授業内容とその指導方法に関する理論的研究、横浜薬科大学教職課程センター研究紀要、(4)、pp. 43-54
- 若松俊介 (2022)、教師のための「支え方」の技術、明治図書、304p.